多文化をあきなう

生産者と消費者を結ぶスタディツアー

――キリマンジャロ・フェアトレード・コーヒーの村へ

辻村英之（京都大学准教授）

フェアトレード商品の生産地を消費者が訪れ、現地を体験的に学ぶスタディツアー。消費者と生産者との交流は、お互いに何をもたらすのか。タンザニアのフェアトレード・コーヒー産地のひとつ、ルカニ村の事例を紹介する。

「子どもと森林を育む」コーヒーのフェアトレード

わたしが一九九六年から調査を続ける、タンザニア・キリマンジャロ山の西斜面にあるルカニ村。日本で高い人気を誇るキリマンジャロ・コーヒーの産地である。教育熱心な村民は、子どもの学費をかせぐためにコーヒーを育てる。そして直射日光を嫌うコーヒーの木は、森林の木かげで育てられる。

しかし九〇年代以降、コーヒー価格の低迷が目立つようになった。特に二〇〇一～〇二年の「コーヒー危機」においては、国際価格が史上最安値の水準にまで暴落した。

多くの村民が、もはやコーヒー生産では学費をかせげないと判断し、離農して街に移るか、トウモロコシに転作した。トウモロコシは直射日光を求めるため木かげが邪魔になり、森林伐採が進んでしまった。

「子どもと森林を育む」コーヒーを再生したい。ルカニ村・フェアトレード・プロジェクトを始めたゆえんである。

生産者を支えるふたつの方法

フェアトレードの国際認証基準は、コーヒー生産者や産地を支えるために、コーヒーの最低輸出価格（一ポンドあたり一ドル四〇セント）を保障すること、フェアトレード報奨金（一ポンドあたり二〇セント）を支払うこと、を規定している。

わたしたちのプロジェクトでは、一ポンド当たり二三セントの報奨金を、ルカニ村の社会（特に教育）開発のために支払っている。これまで、図書館・中学校の建設、保育園の教材購入、コーヒー加工・育苗場の整備、新品種の苗木普及などを促してきた。そして最大の特徴は、農協の役職員と話し合って、二人の子どもの教育費（特に中学校の学費）を各農家が捻出できるコーヒーの販売価格の水準を見出し、その生産者価格を実現する輸出価格（一ドル七一セント／ポンド）を、最低価格として保障していることである。

ルカニ村民はコーヒーの生産意欲を取り戻し、トウモロコシからコーヒーへの再転作、そしてコーヒーに木かげを与えるための植林をはじめている。

報奨金で支援したルカニ中学校の建設(上下)

トウモロコシに転作した若手農業者の畑（後方は従来のコーヒー畑）

コーヒーのあらたな品質

このように、国際基準よりも高い輸出価格と報奨金を支払うことで、ルカニ村産コーヒーの「子どもと森林を育む」特性がよみがえりつつある。残された課題は、この「子どもと森林を育む」特性を、味・香りに上乗せされたコーヒーのあらたな品質だと理解し、積極的に代金を支払う消費者を増やすことである。

日本政府も二〇一二年、「消費者教育の推進に関する法律」を施行し、倫理的、社会的、経済的、環境的配慮に基づいて購買行動をおこなう「消費者市民」の育成を重視しはじめた。しかし長引いた不況の影響で「よいものをより安く」の購買行動が強まっており、「社会的によいもの」に代金を支払う「消費者市民」の増加を阻害している。フェアトレード・コーヒーのなかでもより高価な（それゆえ強い生産者支援力をもつ）ルカニ村産コーヒーも例外ではなく、二〇一二年に年間一八トンから一二トンへ、購入量を減らさざるを得なくなった。

スタディツアーの意義と影響

そこでわたしたちは、日本において「消費者市民」やフェアトレードの自生的発展を促す基礎として、世界に名高い有機農業運動の「産消提携」や生活協同組合の「産直」を位置付けるべきと考えた。それらが重視する生産者と消費者の交流、お互いの顔（生活や価値観など）の見える関係により、生産者の生産・生活を「買い支えたい」消費者の気持ちが芽生えると考えたのである。「コーヒー・スタディツアー――キリマンジャロ・コーヒーの村ルカニへ」は、こうして始まった。

参加者はルカニ村に四泊し、コーヒーの収穫→果肉除去→水洗・乾燥→出荷を体験できる。出荷先の農協においては、役職員と意見交換の場が設けられる。生産者はコーヒーを高く買い続けてくれることを消費者に感謝し、消費者はおいしいコーヒーを売り続けてくれることを生産者に感謝する。この感謝の交換が常だが、場合によっては、価格・品質についての激しい議論になることもある。価格・品質をめぐる消費者の当事者意識が高まる貴重な機会になる。

報奨金で支援している図書館、中学校、保育園、コーヒー加工・育苗場も訪問する。有機農業や森林保全に興味をもつ参加者が多いため、あらたに有機コーヒー生産をはじめた農家や、あきらめずに森林の木かげでコーヒーを生産し続けた農家も、主要な訪問先になる。それを眺めている村民は、自らのコーヒーの愛飲者が、有機・森林コーヒーを好むことを知り、主体的に有機栽培や植林に努めるようになっている。

ルカニ村滞在を経て、「子どもと森林を育む」品質を実感できた参加者は、流通するルカニ村産コーヒーを追いかけるように、街にあるコーヒーの加工・選別工場や競売所へ向かう。そして帰国後も、この愛着あるコーヒーを追いかける参加者が多い。飲み続けるのはもちろん、学生の参加者は学祭やイベントでコーヒーを売り、自家焙煎（ばいせん）店やフェアトレード・ショップの参加者は、取扱量を増やしてくれる。そのおかげで二〇一四年初夏、再度一八トンのルカニ村産コーヒーが日本に到着したのである。

ルカニ農協の役職員との記念写真

園児との交流

コーヒーの収穫体験